

金相寺 寺報

遇

～ ぐ う ～

Encounter magazine "Guu"



智心は古月

達磨は九月

俺は喰ひ一志

智心画

3月

March 2014

No. 6

か み こ くじゅうねん
紙衣の九十年

親鸞聖人はおよそ八百年ほど前、京都に誕生され、九十歳でお亡くなりになりました。

その人生を通してお伝え下さったお念仏の教えは今もお、人々の心に響き、生きる勇氣と力を与え続けています。悪人正機説や肉食妻帯されたということで有名ですが、一体親鸞聖人とはどのような方だったのでしょうか。

ここでは親鸞聖人のご人生について共に触れていきたいと思います。



● 救世観音の夢告

聖徳太子が建立したと伝えられる六角堂に参籠さんろうされて九十五日目の夜明け、救世観音くせかんのんが顔かたちを整え、立派な僧の姿を現し、親鸞聖人に次のように

告げられました。

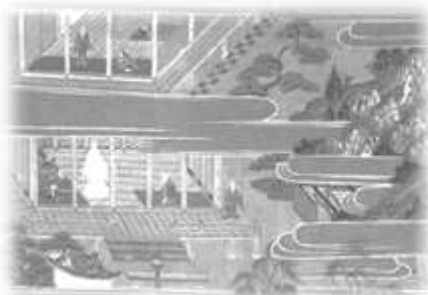
行者宿報設女犯 我成玉女身被犯
一生之間能莊嚴 臨終引導生極樂

(仏道修行者のあなたがこれまでの因縁によって、妻帯することがあっても、私(観音)が玉女という女の姿となって結ばれ、あたなの一生を立派に飾り、臨終には引き導いて、極樂に生まれさせましょう。これは私の誓願です。すべての人に説き聞かせなさい)

その時、親鸞が東方に目を向けると、険しい山々に数千万の人々が集まっており、それらの人に救世観音の言葉を話したところで夢から覚めた、親鸞は記したといわれています。これは「女犯にょはんの夢告」とか「救世観音の夢告」と呼ばれています。

それまでの仏教には、僧侶は一切女性に近づいてはならないという、厳しい戒律がありました。しかし、様々な煩惱から生まれた人間が、その煩惱から離れ切ることができのでしょうか。この矛盾に悶え苦しんでいた親鸞が、「もし肉食妻帯する時は、私(観音)が女となってあげましょう」と告げられたのでした。

これは男も女も、すべての人間がありのままの姿で救われる、阿弥陀仏の絶対の救済のあることを教えた夢と理解することができます。赤山禅院で美しい女性に会ってからの煩悶と、この夢告がきっかけとなり、親鸞は後に肉食妻帯を決意したのです。



『御伝鈔』六角告命



【明 晦】

鉄屑が強烈な磁石に引きつけられる如く、愚生は飛驒の風土に引きつけられ、旅に出る機会を得た。

飛驒高山から北西へ十数キロ行つた処に、古川と云う町がある。高山のような殷賑^{いんしん}さはないが、飛驒の情趣^{せいひつ}ただよう静謐な町並みは、旅人の心をひきつけてはなさないものがある。

「風土は人間をつくり、人間が風土をつくる」と云われる。人の心をひきつける、情趣豊かな古川の町を作り上げてきた古川の人の心の豊かさを感じられる町である。

飛驒地方は真宗門徒の栄んな処と聞いているが、この飛驒古川には「三寺まいり」と云つて。一月十五日の夜、町の中心にある本光寺、真宗寺、

円光寺の三寺をお参りするという古くからの伝統行事がある。この三寺とも浄土真宗の寺であり、如何にも浄土真宗の栄んな土地柄であることが知られる。

この「三寺まいり」の一つである本光寺山門の脇の境内に、一丈もあろうかと思われる親鸞聖人のお像があり、そのお像の脇に明治大正にかけて飛驒地方から信州岡谷の製糸工場へ糸ひき工女として赴き、あまりにも厳しい、想像を絶する過酷な労働を強いられた十代のうら若い女性たちの悲話哀話を著した「あゝ野麦峠」の著者、山本茂実氏の碑がある。



古川本光寺の親鸞聖人像

古川一帯から岡谷の製糸工場へ、糸ひきとして働きに出る十五歳にも満たない少女たちは、いったん古川本光寺へ集まり、本堂のご本尊にお参りしてから各工場の検番に連れられ、歩いて三十里ほどの道程を、途中野麦峠を通つて岡谷へ向かつたのである。

山本茂実氏の聞き取り調査によれば、工女たちは盆と正月の数日の休み以外に休日はなく、毎朝四時半には起床し、夜十時まで労働を強いられるといった、あまりにも劣悪な労働環境であつた。そのために、五年も働けば病魔に冒され、身体はぼろぼろになつて、郷里に帰ることもできず、親兄弟に会うこともできずに息を引き取つた工女、更には病を押しての糸ひきの辛さに耐えきれず、諏訪の湖に入水する工女がどれ程いたことか。後に「入水する工女が絶えず、その屍で諏訪湖の水位が浅くなつた」と噂されるほどであつた。

病に冒され、身はぼろぼろとなり、糸ひきがでなくなつて、工場からの連絡で迎えに来た兄の背に負わされ、故郷の飛騨河合村に帰る途中、野麦峠まで来たところで、故郷の飛騨の山々を眺めながら念仏を称え、寔れた顔に微笑みを浮かべながら息を引き取った工女がいた。時は明治四十二年十一月二十日午後二時、名は政井みね、二十歳であつた。みねは十五歳で信州岡谷の製糸工場の糸ひき工女となつた。当時は工女の中でも評判になるほどの美人で、また優秀な糸ひき手であつたとのことだが、二十歳を迎えた時には、身体は病魔に蝕まれ、工場から「みね病氣、すぐ迎えたのむ」との連絡を受け、兄辰次郎が二日間歩き続け、やっと岡谷の工場へ辿り着き、薄暗い小部屋の片隅に寝かされているみねの姿を見て、辰次郎は愕然とした。「これがあれ程美人、美人と騒がれた妹みねか」寔れ果てて見る影もなかったからである。

このようなうら若い女性のあまりにも辛く悲しいできごとが続いている、時も同じ東京では、国の指導者気取りした者たちが、西洋かぶれした華美な服装で鹿鳴館などに入出し、社交ダンスに興ずる姿が見られた。

明治になり、長い鎖国政策で泰西からは遠く遅れていた日本は、軍備工業技術等を西洋から学ばんがために、西洋諸国から多くの学者、技術者を招いて、富国強兵の政策を推進めていったが、それには莫大な経費を要したのは云うまでもない。その莫大な資金はどこから出たのであるか。その資金の多くがわずか数年で体がぼろぼろになるような過酷な労働環境に強いられた、まだ二十歳にも満たないうら若い女性たちが生産した生糸によつてもたらされた外資であつたことを忘れてはならない。

明治における目覚ましい近代化を裏で支えていたのが、実は糸ひき工

女たちであつた。このようなことは、工女のことに限ったことでは決してない。

「一将功成りて万骨枯る」

日清日露の戦勝で沸き返る日本。その同じ日本の中で、身内の兵士が無念にも野に屍を晒し、泣き悲しんでいた遺族がどれ程おられたことか。何事も人の耳目を引き、喝采を受ける活動、活躍の裏には、必ず表には出ない多くの犠牲があることを忘れてはならない。

今回の飛騨の旅は、まず東本願寺高山別院照蓮寺にお参りし、その後すぐに古川へ向かい、「三寺まいり」で有名な本光寺、そして真宗寺、円光寺とお参りさせていただいた。飛騨最大の木造建築とされる古川本光寺では、先に記したようなことを心の中で呟きながら、しばし本堂に再びお参りし、去り難い気持ちを懷きながらも、飛騨古川を後にした。

成田 宣信（金相寺住職）

御同朋の声

【父の思い出】

濱田 崇（釋法演）氏

平成二十五年四月二十三日、父は八十六歳の生涯を閉じ、彼岸に旅立った。父は、生前に金相寺さんのお付き合いがあり、その御縁で手厚い葬儀をご住職にあげていただいた。父は秋田県で育ち、シベリアで抑留になったあと、復員して私たち家族をもうけた。あの時代の人にとって、捕虜の時間を共に過ごした戦友は特別な関係のようで、元気な頃は戦友会にも参加していたが、皆が同じく年を重ねる中で、何年か前から戦友会も行われなくなった。彼岸では、先に鬼籍に入った戦友との再会

をよろこび、酒宴になっっているに違いない。

父は生前に「釋宣法」との法名をいただいた。「法を宣う」とは、誠に父に相応しい法名である。私も父の他界を機に、東本願寺に出向いて法名をいただいた。偶々ではあるが「釋法演」と授かり、父の法名に似ていることや父と同じ生業に就いていることから、何となく嬉しい。



京都東本願寺
帰敬式※の様子

父の写真が家の床の間にある。毎日「おはよう」、「おやすみ」と語りかけながら暮らしている。毎朝写真に飲み物を備えるが、最近妻が「茶碗を洗う時にコーヒードと器の周り

が汚れているような気がするから、飲んでいるんじゃないかなと」と言う。

家族みんなが父の思い出と共に暮らしている。



帰敬式とは？

「おかみそり」とも言われ、「仏」「法」「僧」の三宝に帰依し、宗祖親鸞聖人が明らかにされた「教え」に自らの人生を問いたずね、真宗門徒として新たな人生を歩み出すことを誓う大切な儀式です。

帰敬式を受式するということは、お釈迦様の弟子（仏弟子）となることであり、仏弟子としての名前である「法名」（釋○○あるいは釋尼○○）が授与されます。法名とは、仏道を歩む者となった新たな名なのです。

正信偈勉強会

学習報告

【原文】

憶念^{おくねん}弥陀^{みだぶつ}仏^{ぶつ}本願^{ほんがん} 自然^{じねん}即時^{そくじ}入^に必定^{ひつじょう}
唯能^{ゆいのう}常称^{じょうしょう}如来^{にょらい}号^{ごう} 応報^{おうほう}大悲^{だいひ}弘誓^{くわんぜい}恩^{おん}

【読み方】

弥陀^{みだぶつ}仏^{ぶつ}の本願^{ほんがん}を憶念^{おくねん}すれば、自然^{じねん}に即時^{そくじ}、必定^{ひつじょう}に入る。
ただよく、常に^{つねに}如来^{にょらい}の号^{ごう}を称^{しょう}して、大悲^{だいひ}弘誓^{くわんぜい}の恩^{おん}を報^{ほう}ずべし、といえり。

【意識】

阿弥陀仏の本願のことを思い続けるならば、おのずと即時に往生が確定する位に入るのである。
ただただ如来の名号を称えて、大悲の弘誓の之恩に報いなければならぬ、と教えられた。

「本願」は「もとからあった願い」ということで、私たちには思いも及ばない遠い昔からはたらく続けている「願い」です。「憶念」というのは、いつも心にとどめて忘れないことです。本願のことを理解するといふのではなくて、そのような願いがはたらいっている事実^{じじつ}に心を保ち続けていることです。（中略）

この私をたすけてやりたいと願っておられる阿弥陀仏の本願のことを、いつも心にとどめているならば、それがそのまま、私の浄土往生を決定することになると、龍樹大士は教えておられるのです。（中略）

それでは私たちはどうすればいいのか。これについて龍樹大士は「ただよく、常に如来の号を称して、大悲弘誓の恩を報ずべし」と教えられています。

ただひたすら、阿弥陀仏のお名前を称えるほかはないということ、阿弥陀仏から贈り続けられている「南無阿弥陀仏」という号を虚心に受け

取らせてもらうほかはないということとです。

（『正信偈の教え・中』本文より）

ゝ 所感 ゝ

京都の専修学院というところで学ばせていただいた頃、当時院長をされていた竹中先生が、よく私たち院生に対して「わかってもらえなくても念仏申しなさい」とおっしゃっていただいたことが思い出されます。私たちは常に私から如来へという方向で念仏申したり、手を合わせたりにしています。実はそれ以前に、私たちの思いを超えて、すでに如来の方から私たちに対して大いなる大慈悲心を持って、必ず救いとげるとはたらきかけてくださっている。その大いなる願いが南無阿弥陀仏のお念仏という形となって、私たちに贈り届けられている。わかってもらえなくても、念仏申させていただく中で、その御心に触れさせていただくということではないかと、昔を懐かしみながら感じています。

青年会だより

金相寺青年会“無意味の会”では、月に一度20代から40代の青・壮年層が集い、日々追い求める意味の世界から一步離れ、日頃感じていることや、関心を持っていることなど、自らの、そして目の前の友人の言葉に耳を傾け合いながら、それぞれの存在を確かめるべく、語り合っています。

原発問題について考える

昔観た『スチーム・ボーイ』という科学の発展をテーマにした映画の中で、登場人物が語った言葉が忘れられません。「科学が悪いのではない。科学の発展に人間の心が追い付いていないのだ」。この言葉にとってもドキッとさせられました。

私たち人間は、より豊かで便利な世の中を求め、目覚ましい科学の発展を遂げてきました。そして、そんな中で創り出されてきたものの象徴のひとつが原発ではないでしょうか。原発によって、より便利で豊かな生活を手に入れることができた一方で、私たちは大きなものを失ってしまったのではないのでしょうか。

今、原発問題に対して、今後の対応が大きな問題として取り上げられています。この青年会でも何回かにわたって参加者の皆さんと意見を交わしてきました。その中で見えてきたことは、そもそも原発問題を問う

時に一番大切なことは、原発の存在そのものというよりもむしろ、それを生み出し、取り扱う私たちの心、あり方なのではないかということです。

これは原発に限ったことではなく、現代社会における様々な問題において同じことが言えるのではないのでしょうか。環境破壊の問題にしても、高齢化・年金問題にしても、その他ありとあらゆる問題において問われていることは、私たちの存在そのものではないかと思うのです。

現代を生きる私たちにとって、今、本当に必要なことは何なのでしょう。今、本当はなにしなければならぬことは何なのでしょう。これはどこかの誰かの問題ではなく、今この私自身が背負わなければいけない責任の問題だと私は思います。そのこと抜きに代替えエネルギーを考えてみたり、制度を見直してみたりとこゝろで、結局のところ根本的な解決にはなりえない。そんな気がしています。

副住職の



日々の出会い



●青年会・子ども会合同開催 報恩講のご報告

去る去年の十一月九日、当寺報恩講の前日に、一足先に青年会・子ども会合同で報恩講をお勤め致しました。

まずはみんなで親鸞聖人が著された『正信偈^{しょうしんげ}』のお勤めをして、その後それぞれお焼香をしてもらいました。



教えてもらいながらお焼香する子どもたちの姿が可愛らしかったです

お焼香後はおはなしです。例年ですと、報恩講は私（副住職）が日頃よりお世話になっている先輩僧侶の方々にお願いをして、大切なおはなし

しをしていただいていたのですが、今年は人任せにしてばかりいないで、自分でしっかり勉強しておはなししなければということで、私がおはなしさせていただきました。



私のはなしに真剣に耳を傾け、いろいろと考えや思いを語ってくれた子どもたち

おはなしを通して、子どもたち、保護者の皆さんとともに「当たり前」と「有り難い」ということについて考えさせていただきました。普段の生活の中で、この身を授かり、生かさせて頂いているという尊い事実を、「当たり前」のこととして過ごしてしまっていないだろうか。「有り難

い」という気持ちを忘れてしまっ
てはいないだろうか。私の問いかけに
一生懸命応えてくれる子どもたちの
感受性の豊かさに驚かされ、また多
くのことを教えられたように思いま
す。

おはなしの最後は、旭山動物園の
園長をされていた小菅正夫さんが文
を書かれた『いのちのいのち』と
いう絵本を自前で紙芝居化したもの
と一緒に読みました。



絵本を読み終わった後に“いのち”の不思議さ、尊さについて、それぞれ色々な思いを語ってくれました

おはなしの後は、境内でけんちん
汁と焼き餅をいただきました。一生

懸命おはなしを聞いて、思いっきり
遊んでお腹が空いたのか、お餅が焼
けるのが全然間に合いませんでした。
沢山作ったはずのけんちん汁も、同
じくあつという間になくなってしま
いました。



段取りが悪く、バタバタでしたが、お手伝いいただいた皆さんありがとうございました

食後は、境内になったみかんをそ
れぞれもいで、食後のデザートとし
て食べました。あまりそのような経
験がないのか、実がなったみかんの
木を前に大はしやぎの子どもたちで
した。

毎回のことですが、あつという間

に時間が過ぎてしまい、気がつけば
閉会の時間に。まだまだ遊び足りな
そうな子どもたちの元気いっぱいな
姿に頼もしさを感じさせられました。
今回も多くの方にご参加いただき
楽しく、また多くのことを感じさせ
てもらえる貴重な時間をいただき、
本当にありがとうございました。
次回の子ども会は四月四日にお釈
迦様の誕生日をお祝いする「花まつ
り」の開催を予定しています。是非
有縁の方々お誘いあわせの上、お気
軽にご参加下さい。皆さんにまたお
会いできることを楽しみにしていま
す。



今後の予定

法要

三月二十一日 春彼岸会
七月十六日 孟蘭盆会
九月二十三日 秋彼岸会
十一月九日 報恩講

勉強会など

四月四日 午後一時～

子ども会花まつり

※ 詳細はホームページをご覧ください

四月五日 午後二時～

正信偈を学ぶ会（輪読・座談会）

※ 以後、偶数月（六・八・十・十二月）の

第一土曜日に開催予定

毎月一回 仏教青年会

※ 毎月の開催日等、詳細はホームページを

ご確認いただくか電話・メールにてお問

合せ下さい

予定は都合により変更する場合がございます。詳細は随時ホームページをご確認いただくか、電話・メールにてお問合せ下さい

編集者雑感

先日、ある友人から奥様ご懐妊の知らせを受けました。私はその報告に素直におめでとうと言うと、その友人はなぜか少し困った顔をするのです。なぜ困った顔をしたのかというと、その友人にはすでに二人の息子さんがいるのですが、今度生まれてくるお子さんも男の子ということが判明し、次こそは女の子が欲しかった奥様がショックで泣きだしてしまったというのです。実はその話を聞いて私は、少しその気持ちがわかるような気がしました。

このことは強い親のエゴというものを表しているのでしょう。時に親は自らのエゴを押し付け、こちらの都合で叱りつけたり、親の思いで子どもを押さえつけようとしたりします。子どもとは親のものではありません。親子関係の中で、お互いに一人の人として向き合い、そのことを通してこちらも親として成長していくことが大切なのだということを改めて教えていただき、自らのあり方を反省させられました。

合掌

『遇ぐぐう』第六号
発行 浄土真宗 霊苔山 金相寺

副住職 成田 宣明

〒252-0328

神奈川県相模原市南区麻溝台726-1

TEL&FAX 042-778-2879

e-mail konsouji@aria.ocn.ne.jp.

URL <http://www6.ocn.ne.jp/~konsouji/>

発行日 二〇一四（仏歴二五五七年）年三月一日